

日本における中国画題綜覧(五)

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (5)

張 小 銅

Zhang Xiaogang

か行 (二)

かくりつけいぐん 鶴立鶏群

嵇紹(263-304)は、字が延祖という。父親は竹林七賢の一人で、有名な嵇康である。ある人は王戎に「昨日人群の中にはじめて嵇延祖を見かけた。彼は堂々として鶏群に立っている鶴のようだ。」と言った。王戎は「あなたはまた彼の父親を見ていないだろう。」と答えた。

【出典】

嵇紹, 字延祖, 魏中散大夫康之子也。「中略」紹始入洛, 或謂王戎曰, 昨於稠人中始見嵇紹, 昂昂然如野鶴之在雞羣。戎曰, 君復未見其父耳。(唐・房玄齡等撰『晋書』卷八十九, 列傳第五十九)
有人語王戎曰, 嵇延祖卓卓如野鶴之在雞羣。答曰, 君未見其父耳。(南宋・劉義慶撰『世說新語』卷下, 容止第十四)

【作例】

「晋太尉忠穆嵇公紹」(清・王齡撰、任熊繪『於越先賢像傳讚』卷上、咸豐六年 [1856] 刊本)

かくりゆう 郝隆

郝隆は七月七日に日当たりのところで横になった。ある人は彼のそのわけを聞くと、「私は書物を曝している。」と。また、郝隆が桓公の南蛮参軍になった頃、三月三日に曲水の宴が行われた。詩を書けない人に罰として酒を三斗飲まなければならぬ。郝隆が最初書けなかったので、罰を受けた。酒を飲んだ後、早速筆を手に取り、「娠隅躍清池。」(魚が透き通った池水から躍り出た)という詩句を書いた。桓公は「娠隅とは何か。」と尋ねた。「魚の蛮名だ。」と答えた。桓公は「詩を作るのに、なぜ蛮語を使うか。」と聞くと、郝隆は「遙々あなたのところにやってきて、やっと南蛮参軍になったので、蛮語を使わないわけにはいけない。」と答えた。あるとき、人が薬草を桓公に献上した。中には「遠志」という名前の薬草があった。桓公は遠志を手に取り、謝安に「この薬草はまた小草ともいう。なぜ一つのものに二つの名前があるのだろうか。」と、謝安に尋ねた。謝安はすぐには答えられなかった。すると、その場にいる郝隆は「これは簡単だ。種の時に大志を抱いていないから、生えてくると小さな草となる。」と大声で言った。謝安は顔が真っ赤になった。桓公は謝安を見ながら笑って、「郝参軍の過ちは悪くない。よくできたな。」と言った。

【出典】

郝隆七月七日出日中仰臥, 人問其故, 答曰, 我曬書。謝公始有東山之志, 後嚴命屢臻, 勢不獲已, 始就桓公司馬。于時人有餉桓公藥草,

中有遠志。公取以問謝，此藥又名小草，何一物而有二稱。謝未即答。時郝隆在座，應聲答曰，此甚易解，處則爲遠志，出則爲小草。謝甚有愧色。桓公目謝而笑曰，郝參軍此過乃不惡，亦極有會。〔中略〕郝隆爲桓公南蠻參軍。三月三日會，作詩。不能者，罰酒三斗。隆初以不能受罰，既飲，攬筆便作一句，云，娥隅躍清池。桓問，娥隅是何物。答曰，蠻名魚爲娥隅。桓公曰，作詩何以作蠻語。隆曰，千里投公，始得蠻府參軍，那得不作蠻語也。（南朝宋・劉義慶撰『世說新語』排調第二十五）

【作例】

〔郝隆〕（橘有税『繪本故事談』卷六、正徳四年〔1714〕序、稱觥堂刊本）

〔郝隆〕（馬場信意『分類畫本良材』卷三、正徳五年〔1715〕刊本）

〔郝隆〕（文鳳駿聲『文鳳漢畫』享和三年〔1803〕吉田新兵衛等刊本）

〔郝隆〕（武者周榮筆『古畫要覽』安永九年〔1780〕刻成、文化九年〔1812〕求版）

かくりゆうさうしよ 郝隆曬書

→〔郝隆〕

【作例】

〔郝隆曬書〕（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷四、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

かくれんりゆうせん 郝廉留錢

郝廉は大変貧しいが、人に迷惑をかけない。姉のところでは食事をして、金を残して帰った。また彼はいつも井戸の水を飲み、いつも一錢を井戸に投げ込んだという。

【出典】

〔風俗通〕郝子廉饑不得食。寒不得衣。一介不取諸人。曾過姊飯，留錢席下而去。每行飲水，常投一錢井中。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

〔郝廉留錢〕（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷三、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

かげんさ 河源槎

無名氏の『無雙譜』に「張騫」という画題の絵がある。その絵に「騫は漢中の人である。建元の頃、郎という官職に就き、大宛への使節に応募した。騫は河の源を遡ろうとして、いかだに乗ってあるところに行つた。そこに織姫が石で織機を支えているが、騫を見て石を与えた」と記している。

【出典】

乗槎去森難，駐欲覓河源。竟何遇，竟何遇織女來，取得支機石，似梅宣房塞令決不止，何不徑塞河源回。（清・金古良編繪『無雙譜』）

【作例】

〔河源槎〕（清・金古良編繪『無雙譜』、康熙二九〇三八年〔1690-1699〕刊本）

かこう 何侯

何侯は堯の頃蒼梧山に隠居し、長生きを羨望していた。舜帝が南に狩獵した際、何侯の家に泊まった。その時、天帝五老がやってきて舜帝に「昇天の日にちが決まった」と告げた。翌日、五帝が迎えに来た。そこで舜帝が白日昇天した。禹帝の頃、五帝が薬を何侯に与え、酒に入れるよう指示した。一族三百人余りが飲んでも、飲みきれなかった。余りの酒を家屋にかけると、家屋ごと昇天した。何侯が太極仙人となった。今、崑山に何侯廟があり、舜廟の側にある。

【出典】

何侯者、堯時隱蒼梧山。慕長生，三百餘口皆耕耘。舜南狩，止何侯家。天帝五老來謂舜曰，昇舉有期。翌日，五帝下迎，舜白日昇天。夏禹時，五帝以藥一器與何侯，使投酒中。一家三百餘口，飲不竭。以餘酒灑屋宇，拔宅上昇。位爲太極仙人。今崑山有何侯廟，在舜廟側。(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一)

【作例】

「何侯」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一、萬曆二八年 [1600] 刊本)

「何侯」(寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』一、天明四年 [1784] 寂照寺藏板)

かこうこう 夏黄公

夏黄公は四皓の一人である。

↓「四皓」

【作例】

「夏黄公」(滝澤清畫『潜龍堂畫譜』人物之部、明治一五年 [1882] 求古堂梓)

かこうこう 娥江行

↓「曹娥」

かこうげん 夏侯玄

夏侯玄(209～?)、字は太初といい、沛国譙郡(安徽省亳)の人である。若い頃から名声があった。弱冠にして散騎黃門侍郎になった。かつて夏侯玄が明帝に謁見した際、皇后の弟毛曾と並んで座っていた。そのため、夏侯玄が恥を感じ、顔に現れた。明帝が彼を怨み、羽林監

に左遷した。正始(240～249)の初め頃、曹爽が国政を運営していた。夏侯玄は曹爽の父親方の叔母の子であり、曹爽と従兄同士である。そのため、夏侯玄は順調に出世し、散騎將軍、中護軍、征西將軍を歴任した。曹爽が殺された後、夏侯玄は大鴻臚、太常に左遷された。後に中書令李豊等と共に謀して反乱を起こそうとしたが、情報が漏れ、夏侯玄が李豊等とともに処刑された。年は四十六歳であった。処刑される前に、夏侯玄は落ち着いて、顔色も変わらなかつたという。

【出典】

「玄」太初。少知名，弱冠爲散騎黃門侍郎。嘗進見，與皇后弟毛曾並坐，玄恥之，不悅形之於色。明帝恨之，左遷爲羽林監。正始初，曹爽輔政。玄，爽之姑子也。累遷散騎常侍、中護軍。「中略」頃之，爲征西將軍，假節都督雍、涼州諸軍事。與曹爽共興駱谷之役，時人譏之。爽誅，徵玄爲大鴻臚，數年徙太常。玄以爽抑紕，內不得意。中書令李豊雖宿爲大將軍司馬景王所親待，然私心在玄，遂結皇后父光祿大夫張緝，欲謀以玄輔政。豊既內握權柄，子尚公主，又與緝俱馮翊人，故緝信之。豊陰令弟兗州刺史翼求入朝，欲使將兵入，并力起。會翼求朝，不聽。嘉平六年二月，當拜貴人，豊等欲因御臨軒，諸門有陞兵，誅大將軍，以玄代之，以緝爲驃騎將軍。豊密語黃門監蘇鑠、永寧署令樂敦、宄從僕射劉賢等曰，卿諸人居內，多有不法，大將軍嚴毅，累以爲言，張當可以爲誠。鑠等皆許以從命。大將軍微聞其謀，請豊相見，豊不知而往，即殺之。事下有司，收玄、緝、鑠、敦、賢等送廷尉。「中略」於是豊、玄、緝、鑠、敦、賢等皆夷三族，其餘親屬徙樂浪郡。玄格量弘濟，臨斬東市，顔色不變，舉動自若，時年四十六。(晉・陳壽撰『三國志』卷九，魏書・諸夏侯曹傳第九)

かこうこうきょうおう 花項虎龔旺

龔旺は『水滸伝』の中の一人の豪傑で、綽名は「花項虎」という。

もとは東昌府の武将であったが、後に梁山泊に入った。

【出典】

只見白勝前來報説、盧俊義去東昌府、連輸了兩陣。城中有箇猛將、姓張名清、原是彰德府人、虎騎出身。善會飛石打人、百發百中、人呼爲沒羽箭。手下兩員副將、一箇喚做花項虎龔旺、渾身上刺着虎斑。脖項上吞着虎頭、馬上會使飛槍。一箇喚做中箭虎丁得孫、面頰連項、都有疤痕、馬上會使飛叉。（百二十回本『水滸傳』第七十回）

【作例】

「龔旺」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本）

「花項虎龔旺」（葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓）

「花項虎龔旺」（仮名垣魯文標記、一雲齋国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1868〕不朽堂刻本）

「花項虎龔旺」（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年〔1867〕序、大橋堂梓・藏板）

かこうしゅうかい 夏侯拾芥

夏侯勝は、字が長公といい、東平（山東省）の人である。若い頃勉強が好きである。太后尚書、太子太傅を歴任した。彼は弟子たちに講義した際、いつも「士にとって、経学を究明できないことが恥である。もし究明できれば、高官の地位や高禄を取るのには芥を拾うようなものである」と、話していた。

【出典】

前漢 夏侯勝字長公、東平人。少好學。爲人質樸守正、簡易亡威儀。宣帝時遷太子太傅。受詔撰尚書論語說、賜黃金百斤。年九十卒官。初勝授太后尚書。故賜錢二百萬、素服五日、以報師傅之恩。儒者以

爲榮。始勝每講授、常謂諸生曰、士病不明經術。經術苟明、其取青紫如俛拾地芥。學經不明、不如歸耕。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「夏侯拾芥」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷五、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

かこうじゅん 夏侯惇

夏侯惇、字が元讓といい、沛国譙（安徽省合肥）の人であり、夏侯嬰の末裔である。十四歳の頃、師に学ぶ。ある人が師を辱めたので、惇はその人を殺してしまった。そのため、気性が激しい人として有名になった。魏の太祖曹操が最初軍隊を率いて討伐の際、惇は常に副将としてついて行った。後に太祖は惇を司馬、折衝校尉、東郡太守に任命した。彼は呂布を討伐した際、左目が流れ矢に撃たれた。さらに陳留、洛陰の太守、建武將軍、高安郷侯になった。魏の文帝が即位した後、惇を大將軍に任命した。数ヶ月後、亡くなった。諡は「忠侯」という。

【出典】

夏侯惇、字元讓、沛國譙人。夏侯嬰之後也。年十四、就師學、人有辱其師者、惇殺之、由是以烈氣聞。太祖初起、惇常爲裨將、從征伐。太祖行奮武將軍、以惇爲司馬、別屯白馬、遷折衝校尉、領東郡太守。太祖征陶謙、留惇守濮陽。張邈叛迎呂布、太祖家在鄆城、惇輕軍往赴、適與布會、交戰。布退還、遂入濮陽、襲得惇軍輜重、遣將僞降、共執持惇、責以寶貨、惇軍中震恐。惇將韓浩乃勒兵屯惇營門、召軍吏諸將、皆案甲當部不得動、諸營乃定。遂詣惇所、叱持質者曰、汝等凶逆、乃敢執劫大將軍、復欲望生邪。且吾受命討賊、寧能以一將軍之故、而縱汝乎。因涕泣謂惇曰、當奈國法何。促召兵擊持質者。持質者惶遽叩頭言、我但欲乞資用去耳。浩數責、皆斬之。

惇既免、太祖聞之、謂浩曰、卿此可爲萬世法。乃著令、自今已後有持質者、皆當并擊勿顧質。由是劫質者遂絕。太祖自徐州還、惇從征呂布、爲流矢所中、傷左目。復領陳留、濟陰太守、加建武將軍、封高安鄉侯。「中略」二十四年、太祖軍擊破呂布軍於摩陂、召惇常與同載、特見親重。出入臥內、諸將莫得比也。拜前將軍、督諸軍還壽春、徙屯召陵、文帝即王位、拜惇大將軍、數月薨。惇雖在軍旅、親迎師受業。性清儉、有餘財輒以分施、不足資之於官、不治產業。諡曰忠侯。(晉・陳壽撰『三國志』卷九、魏書・諸夏侯曹傳第九)

【作例】

「夏侯惇拔矢啖睛」(『李卓吾先生批評三國志』第十七回、明末建陽吳觀明刊本)

「夏侯惇」(百二十回本『繪圖三國演義』、光緒一六年[1890]上海圖書集成局刊本)

「夏侯惇」(笠翁筆)(法眼春卜一翁集『書史會要』卷二、寬延四年[1751]須原茂兵衛等刊本)

がこうじょえい 娥皇女英

舜の二人の妃は、堯の二人の娘である。長女は娥皇といい、次女は女英という。舜は堯の帝位を継ぎ、娥皇は皇后となり、女英は妃となった。天下は娥皇女英を称賛した。舜は南を視察した際、崩御した。二人は悲しくて泣きやまない。その涙は竹に落ち、沢山の斑点となった。故に「斑竹」という。また「湘妃竹」ともいう。二人は遂に湘江に舜の後を追うように身を投げた。そのために皆娥皇女英を「湘君」と呼んでいるという。

【出典】

有虞二妃者、帝堯二女也。長娥皇、次女英。舜父頑母瞽。父號瞽叟。弟曰象。傲遊於嬖、舜能諧柔之、承事瞽叟以孝。「中略」舜既嗣位

爲天子。娥皇爲后、女英爲妃。封象於有庠。事瞽叟猶若焉。天下稱二妃聰明貞仁。舜陟方。死蒼梧。號重華。二妃死湘江之間。俗謂之湘君。(漢・劉向撰、明・茅坤補『新鐫增補全像評林古今列女傳』卷一)

湘川記。舜南巡狩、崩於蒼梧之野。娥皇女英二妃悲泣不輟。以淚灑竹。竹盡成斑。至今號湘妃竹。(清・李笠翁撰『芥子園畫傳』四集卷四)

【作例】

「娥皇女英」(清・王翹繪『百美新詠』圖傳十八、嘉慶年間[1796-1820]刊本)

「娥皇女英」(吳友如畫寶)第三集上・古今百美圖、中国古畫譜集成第二十一卷、山東美術出版社、2000年)

「娥皇女英」(後素軒橋有税『繪本故事談』卷四、正徳四年[1714]稱航堂刊本)

かさん 華山

華山は五嶽の一つで、西嶽ともいう。華山は弘農の華陰県(陝西省)にある。華とは花という意味で、万物が成長して西方に花として現れる。また、華山の山頂に池があり、池に千葉蓮華が生えており、人がその蓮華を服用すると仙人になって羽化する。故に華山という。

【出典】

西方華山、華者、華也、萬物滋熟、變華於西方也。廟在弘農華陰縣。(漢・應劭撰『風俗通義』卷一〇、中華書局、一九八一年、四四七頁)

按華山五嶽之西嶽也。在周官豫州、其鎮山曰華山。華山記云、頂有池、生千葉蓮花、服之羽化、因曰華山。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八卷)

【作例】

〔華山圖〕（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

〔華山〕（寺島良安撰『和漢三才圖會』卷五十六、正徳二年〔1712〕序、杏林堂藏板）

〔華山〕（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷二、享保四年〔1719〕寶文堂刊本）

↓〔華嶽〕

かさごせん 華山五仙

華山五仙とは衛叔卿、許由、巢父、洪厓先生、王子晋である。

【出典】

『列仙傳』というが、未詳。

【作例】

〔華山五仙〕（後素軒橘有税『繪本故事談』卷二、正徳四年〔1714〕稱航堂刊本）

かしくく 可只國

可只國は西番国の宝物の産地である。

【出典】

可只國、西番出寶物處。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷）

【作例】

〔可只國〕（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

〔可只國〕（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年〔1719〕寶文堂刊本）

かじゅんじゅそう 賀循儒宗

賀循（260-319）は、字は彦先といい、會稽山陰（浙江省紹興）の人である。言行が礼儀正しく、いつも人を讓った。太子太傅、太常などを歴任した。朝廷が時々循の意見を諮るが、循がいつも儒家の經典と礼儀に基づき答える。当世の儒宗として尊ばれたという。（『晉書』卷六十八）

【出典】

〔晉書〕賀循字彦先、會稽山陰人。操尚高厲、童齒（有立刀）不群。言行進止、必以禮讓、武初為中書令、加散騎常侍、固辭、改拜太常、朝廷滯皆諮之。循則依經禮而對、為世宗儒。（唐・李瀚撰『蒙求集注』卷上）

【作例】

〔賀循儒宗〕（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷五、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

かじょうこう 河上公

河上公の姓や字はよく分からない。漢の文帝の頃、河上公は川辺で草庵を建てて住んだ。文帝は老子の経を好み、諸王や大臣たちに皆読むよう命じた。分からないことがあれば、使者を派遣して河上公の草庵に行く。河上公は言った。「道は尊び、徳は貴い、使者を派遣して質問してはいけない。」と。帝が仕方なく自ら草庵を訪れ、質問した。帝は「天下の土は、すべて王の土であり、その土に住んでいる人間はすべて王の臣民である。域の中には四つの大きいものがある。王はその第一を占める。あなたは道があるが、なお私の臣民である。どうしてその頭を下げないで、格好をつけるのか。」と言った。すると、河上公は早速手を合わせて座ったままゆっくりと空中に浮揚した。地

面から数丈を離れて、帝に向かつて答えた。「私は上には天に至らず、中には人の邪魔をせず、下には地に住まない。どうして臣民と言えるだろう。」と。そこで帝が下車し、謝った。河上公は帝に素書を二巻与えて、言った。「よく読んでください。この経についての疑問への回答はすべて中にある。これ以上言う必要がない。私はこの経に注釈して以来、千七百年になる。およそ三人に伝授した。帝が四人目だ。どうかそれ以外の人に見せないでください。」と、言い終わると、姿をくらました。しばらくして雲や霧で空が暗くなり、天と地が一体になったようである。帝はその書物を大切にしていた。また、河上公はすなわち老子のことであるという説もある。

【出典】

河上公者、莫知其姓名也。漢孝文帝時、結草爲庵于河之濱。常讀老子道德經。時文帝好老子之道、詔命諸王公、大臣、州牧、在朝卿士皆令誦之。不通老子經者、不得陞朝。帝於經中有疑義、人莫能通。侍郎裴楷奏云、陝州河上有人誦老子。即遣詔使賚所疑義問之。公曰、道尊德貴、非可遙問也。帝即駕幸詣之。公在庵中不出。帝使人謂之曰、溥天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王民。域中四大、而王居其一。子雖有道、猶朕民也。不能自屈、何乃高乎。朕能使民富貴貧賤須臾。公即拊掌坐躍、冉冉在空中虛之中、去地百餘尺、而止於虛空。良久、俛而答曰、余上不至天、中不累人、下不居地、何民之有焉。君宜能令余富貴貧賤乎。帝大驚悟、知是神人、方下鞶韞首禮謝曰、朕以不能忝承先業、才小任大、憂於不堪。而志奉道德、直以暗昧。多所不了。惟願道君垂愍、有以教之。河上公即授素書老子道德章句二卷、謂帝曰、熟研究之、所疑自解。余著此經以來、千七百餘年、凡傳三人、連子四矣。勿示非人。帝即拜跪受經。言畢、公失所在。遂於西山築臺臺之不復見矣。論者以爲文帝雖耽尚大道、而心未純信。故示神變、以悟帝。意欲成其道。時人因號曰、河上公。(晉・葛洪

撰《神仙傳》卷八)

河上公。老子漢文時爲河上公。(宋・陳元觀撰『事林廣記』卷六)

【作例】

「河上公」〔『事林廣記』卷六、元禄二二年 [1691] 和刻本〕

かじょうこく 訶條國

【出典】

訶條國、金遼山廟有石鼯、如人飲食將盡、向鼯行禮、則飲食悉具。

(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷)

【作例】

「訶條國」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷、萬曆三七年 [1609] 刊本)

「訶條國」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 寶文堂刊本)

かしょうし 何尚之

何尚之(382-460)、字は彦徳といい、廬江灑(安徽省合肥)の人である。祖父は南康太守であった。父親は官職に就かなかつた。尚之は子供の頃、不良少年で、双六などの賭博がすきであつた。大きくなると、人ががらりと変わり、高尚な節操を以てよく知られる。丹陽尹を務めた際、南郭の外に家を建て、玄学校を設け、学生を集めた。東海の徐秀、廬江の何雲、黄回、潁川の荀子華、太原の孫宗昌、王延秀、魯郡の孔惠宣など、皆憧れて遊学に來た。いわゆる「南学」であつた。尚之は多くの官職を歴任したが、最後に侍中、左光祿、開府儀同三司になつた。大明四年、病に倒れ、在任中亡くなつた。七十九歳であつた。死後司空の官職を贈られた。諡は「簡穆公」という。

【出典】

何尚之字彥德，廬江濡人也。曾祖準，高尚不應徵辟。祖愷，南康太守。父叔度，恭謹有行業。姨適沛郡劉璩，與叔度母情愛甚篤，叔度母蚤卒，奉姨有若所生。姨亡，朔望必往致哀，并設祭奠，食並珍新，躬自臨視。若朔望應有公事，則先遣送祭，皆手自料簡，流涕對之，公事畢，即往致哀，以此爲常，至三年服竟。「中略」後爲金紫光祿大夫，吳郡太守，加秩中二千石。太保王弘稱其清身潔己。元嘉八年，卒。尚之少時頗輕薄，好搏蒲。既長折節蹈道，以操立見稱。爲陳郡謝混所知，與之遊處。家貧，起爲臨津令。高祖領征西將軍，補府主簿。從征長安，以公事免，還都。因患勞疾積年，飲婦人乳，乃得差。以從征之勞，賜爵都鄉侯。少帝即位，爲廬陵王義真車騎諮議參軍。義真與司徒徐羨之、尚書令傅亮等不協，每有不平之言，尚之諫戒，不納。義真被廢，入爲中書侍郎。太祖即位，出爲臨川內史，入爲黃門侍郎，尚書吏部郎，左衛將軍。父憂去職，服闋。復爲左衛，領太子中庶子。尚之雅好文義，從容賞會，甚爲太祖所知。十二年，遷侍中，中庶子如故。尋改領游擊將軍。十三年，彭城王義康欲以司徒左長史劉斌爲丹陽尹，上不許。乃以尚之爲尹，立宅南郭外，置玄學，聚生徒。東海徐秀、廬江何曇、黃回、潁川荀子華、太原孫宗昌、王延秀、魯郡孔惠宣，並慕道來遊，謂之南學。「中略」二十二年，遷尚書右僕射，加散騎常侍。是歲，造玄武湖，上欲湖中立方丈、蓬萊、瀛洲三神山，尚之固諫乃止。「中略」大明二年，以爲左光祿，開府儀同三司，侍中如故。尚之在家常著鹿皮帽，及拜開府，天子臨軒，百僚陪位，沈慶之於殿廷戲之曰，今日何不著鹿皮冠。慶之累辭爵命，朝廷敦勸甚篤，尚之謂曰，主上虛懷側席，詎宜固辭。慶之曰，沈公不効何公，去而復還也。尚之有愧色。愛尚文義，老而不休，與太常顏延之論議往反，傳於世。立身簡約，車服率素，妻亡不娶，又無姬妾。秉衡當朝，畏遠權柄，親戚故舊，一無薦舉，旣以致怨，亦以此見稱。復以本官領中書令。四年，疾篤，詔遣侍中沈懷

文、黃門侍郎王釗問疾。薨于位，時年七十九。追贈司空，侍中、中書令如故。諡曰簡穆公。（梁・沈約撰『宋書』卷六十六，列傳第二十六）

【作例】

「何尚之」（橋有税『繪本故事談』卷七、正徳四年〔1714〕稱航堂刊本）

かしようし・えんえんし 何尚之・顔延之

何尚之（382～460）と顔延之（384～456）は二人とも背が低い。尚之は延之を猿と称し、延之は尚之を猿を称す。ある日、二人は一緒に太子西池を遊覧し、途中道の人に延之が「二人はどちらが猿に似ているか」と尋ねた。道の人は尚之を指しながら「似ている」と言った。延之が嬉しそうであった。しかし道の人はさらに「彼は猿に似ているが、君こそ真の猿なのだ」と付け加えた。

【出典】

尚之愛尚文義，老而不休。與太常顔延之少相好狎，二人並短小，尚之常謂延之爲猿。延之目尚之爲猴。同遊游太子西池，延之問路人云，吾二人誰似猴。路人指尚之爲似。延之喜笑。路人曰，彼似猴耳，君乃真猴。（唐・李延壽撰『南史』卷三十，列傳第二十）

かしわぎのたね 栢樹子

「祖師の西來の意は何だらう。」と質問。師は「庭前の栢樹子。」と答えた。曰く、「和尚は境を人に示さないでください。」と。師は「私は境を人に示さない。」と答えた。曰く、「祖師の西來の意は何だらう。」と。師は「庭前の栢樹子。」と答えた。

【出典】

問，如何是祖師西來意。師曰，庭前栢樹子。曰，和尚莫將境示人。

師曰、我不將境示人。曰、如何是祖師西來意。師曰、庭前栢樹子。(宋・普濟撰『五燈會元』卷四、南泉願禪師法嗣)

【作例】

「栢樹子」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年[1687]刊本、文政1年[1818]再刊本、平林屋清三郎等梓行)
「栢樹子」(某岡之繪『繪圖の林』卷下、元禄二年[1699]刊本)

かしんだんき 軻親斷機

↓孟母斷機

【出典】

「古列女傳、鄒孟軻母、其舍近墓。孟子少嬉遊、爲墓間之事。孟母曰、此非吾所以居處子也。乃去、舍市傍。其嬉戲乃賈人銜賣之事。又曰、此非吾所以居處子也。復徙舍學官之傍。其嬉戲乃設俎豆、揖讓進退。孟母曰、眞可以居吾子矣。遂居。及孟子既學而歸、孟母問學所至。孟子曰、自若也。孟母以刀斷其織曰、子之廢學、若吾斷斯機也。孟子懼、旦夕勤學不息。師事子思、遂成名儒。君子謂、孟母知爲人母之道。(唐・李瀚撰『蒙求』)

【作例】

「軻親斷機」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷八、享和元年[1801]序刊本、河内屋等發行)

かせんこ 何仙姑

何仙姑は八仙人の一人で、広州増城縣(広東省増城)の何泰という人の娘である。生まれてつっぺんに六本の髪の毛しかない。唐の則天武后の頃、何仙姑は雲母溪に住んでいた。十四、五歳の頃、何仙姑は神人の夢を見た。神人は「雲母粉を服用すれば、体が軽くなり、不老不死だ。」と教えた。目が覚めてからはっきりと覚えている。そこ

で何仙姑は服用した。遂に嫁がないことを決心した。よく山谷の間を行き来し、飛ぶように歩いていた。毎朝出かけて、夕暮れに戻ってくる。いつも山の果実を持ち帰って母親に渡す。後に修行のために徐々に食事を口にしなくなり、言葉も異常となった。則天武后は使者を派遣して迎えに来たが、途中で行方不明となった。景龍(707～709)年間、何仙姑は白日昇天を果たした。天寶九年(750)、麻姑壇で現れた。五色の雲の中に立っていた。大暦(766～779)年間、広州の小石楼でまた姿が現れた。刺史高翥がこのことを朝廷に報告した。

【出典】

何仙姑、廣州増城縣何泰女也。生而頂有六毫。唐武后時、住雲母溪。年十四五、夢神人教曰、食雲母粉、當輕身不死。夢明甚、因餌之、遂誓不嫁。常往來山谷、其行如飛。每朝去、暮則持山果歸遺其母。後漸辟穀、語言異常。武后遣使召赴闕中、路復失去。景龍中、白日昇仙。天寶九載、見于麻姑壇、立五色雲中。大暦中、又現身於廣州小石樓。刺史高翥上其事于朝。(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷六)

【作例】

「何仙姑」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷六、萬曆二八年[1600]刊本)
「何仙姑」(明・洪應明撰『仙佛奇踪』卷二、萬曆三〇年[1602]刊本)
「何仙姑」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十一卷、萬曆三七年[1609]刊本)
「何仙姑」(林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年[1712]序、享保六年[1721]刊本)
「何仙姑」(渡邊瑛編『邊氏畫譜』、文化三年[1806]序刊本)

かそうけんい 賈琮褰帷

後漢の賈琮は、字は孟堅といい、東郡聊城（山東省聊城）の人である。漢靈帝（168-189在位）の頃、賈琮が冀州（河北省）の刺史であった。規則によると、刺史が驂駕（添え馬の付き）の馬車に乗ることができ、その馬車が赤い帷が垂れて中の様子が見えないようになる。しかし、賈琮がいう。「刺史の仕事は各方面の意見を聞き、悪いことを糾弾することですので、なぜ帷を下ろすでしょうか」と。御者に帷を巻き上げるよう命じたという。

【出典】

後漢 賈琮字孟堅，東郡聊城人。靈帝時爲冀州刺史。舊典，傳車驂駕。垂赤帷裳，迎於州界。及琮之部，升車言曰，刺史當遠視廣聽，糾察美惡。何有反垂帷裳，自以掩塞乎。乃命御者褰之。百城聞風，疎震。其諸臧過者，望風解印綬去。初交趾屯兵反。有司舉琮爲刺史。琮到部訊其反狀。咸言賦斂過重，民不聊生。故聚爲盜賊。琮及告示，各使安其資業，招撫荒散。（唐・李翰撰「蒙求」）

【作例】

「賈琮褰帷」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編卷四、享和元年〔180〕序刊本、河内屋等發行）

かだいじんにいほうをうけるつ

華陀異人に醫法を受ける圖

【作例】

「華陀異人に医法を受く」（橋守国『繪本直指寶』卷三、延享二年〔1745〕刊本）

かだごきん 華陀五禽

華陀が考案した「五禽戲」という健身方法である。すなわち虎、鹿、熊、猿及び鳥といった五つの長寿の動物の動きを真似て、体を動かすということである。

【出典】

後漢 華佗字元化，沛國譙人。兼通數經，曉養性之數。年且百歲，猶有壯容。時人以爲仙。精於方藥，處劑不過數種。針灸不過數處。若發疾結於內，針藥所不能及者，乃令先以酒服麻沸散，既醉無所覺，因剝破腹背，抽割積聚。若在腸胃，則斷截湔洗疾穢，既而縫合，傳以神膏。四五日創癒，一月間平復。爲人性惡，且恥以醫見業。曹操累書呼之。數月不反。竟殺之。廣陵 吳普從佗學。佗謂普曰，人體欲得勞動。但不當使極耳。動搖則穀氣則銷，血脈流通，病不能生。譬猶戶樞，終不朽也。古之仙者爲導引之事，熊經鴟顧，引挽腰體，動諸關節，以求難老。吾有一術。名五禽之戲。一曰虎，二曰鹿，三曰熊，四曰猿，五曰鳥。亦除疾，兼利蹠足，以當導引。體有不快，起作一禽之戲，怡而汗出。以因著粉，身體輕便而慾食。普施行之，年九十餘，耳目聰明，牙齒完堅。（唐・李翰撰「蒙求」）

【作例】

「華陀五禽」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編卷四、享和元年〔180〕序刊本、河内屋等發行）

かだてんそく 畫蛇添足

楚の国で人が祭祀を行った。終わった後、主人がご褒美として舎人たちに一杯の酒を賜った。舎人たちは相談した。「数人で飲むには足りないが、一人で飲むには余裕だ。地面で蛇を描こう。先に完成した人が飲む。」と。ある人は先に完成した。彼は左手に盃を持ち、酒を飲みながら、右手で続けて蛇を描く。「私は蛇に足を描ける。」まだ完成していないうち、もう一人が絵を完成した。彼の盃を奪い、「蛇は

もともと足がないのに、あなたはなぜ足を描けるだろうか。」と言った。遂にその酒を飲んだ。蛇のために足を描いた人は結局酒を失ってしまった。

【出典】

楚有祠者，賜其舍人卮酒。舍人相謂曰，數人飲之不足，一人飲之有餘。請畫地爲蛇，先成者飲酒。一人蛇先成，引酒且飲之，乃左手持卮，右手畫蛇，曰，吾能爲之足。未成，一人之蛇成，奪其卮曰，蛇固無足，子安能爲之足。遂飲其酒，爲蛇足者，終亡其酒。〔戰國策〕卷九，齊策二)

【作例】

「畫蛇添足」(橘宗重著、長谷川等雲繪『増補繪本寶鑑』卷一、享保年間 [1716 - 1736] 刊本)

かたんほこうのぞ 荷擔歩行圖

【作例】

「荷擔歩行圖」(信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』卷六・補遺、明和六年 [1771] 大野木寶文堂梓)

がちしょう 賀知章

賀知章(659 - 744) は会稽永興(浙江省紹興)の人である。子供の頃から詩文がよくできる。科挙の試験に及第して進士になった。最初は国子四門博士に任命され、さらに太常博士に栄転した。唐の玄宗帝の開元十年(722)、兵部尚書張説の要請で、共同で六典及び文纂などを編修したが、何年が経っても完成できなかった。開元十三年(725)、禮部侍郎、集賢院學士、皇太子侍讀に任命された。後に太子が亡くなった。挽郎を選抜された際、賀知章は公平でないと主張して、梯子を持って壁を登って抗議した。そのため工部侍郎に移された。知

章は詩文だけではなく、草書や隸書も大変得意である。彼の性格はあつさりしていて、談笑が得意である。晩年にもつとやりたい放題で、自ら「四明狂人」を号とし、また「秘書外監」という。玄宗帝の天寶三年(752)、知章が病気で意識恍惚の状態に陥り、上奏文をだして故郷の自宅を道觀にし、自分も帰郷して道士になりたいと願いだした。帝がこれを許し、知章が帰った後、間もなく病死した。

【出典】

賀知章，會稽永興人，太子洗馬德仁之族孫也。少以文詞知名，舉進士。初授國子四門博士，又遷太常博士，皆陸象先在中書引薦也。開元十年，兵部尚書張説爲麗正殿修書使，奏請知章及祕書員外監徐堅、監察御史趙冬曦皆入書院，同撰六典及文纂等，累年，書竟不就。後轉太常少卿。〔中略〕十三年，遷禮部侍郎，加集賢院學士，又充皇太子侍讀。是歲，玄宗封東嶽，有詔應行從羣臣，並留於谷口，上獨與宰臣及外壇行事官登於嶽上齋宮之所。初，上以靈山清潔，不欲喧繁，召知章講定儀注，因奏曰，昊天上帝君位，五方諸帝臣位，帝號雖同，而君臣異位。陛下享君位於山上，羣臣祀臣位於山下，誠足垂範來葉，爲變禮之大者也。然禮成於三獻，亞終合於一處。上曰，朕正欲如是，故問卿耳。於是敕，三獻於山上行事，五方帝及諸神座於下壇行事。俄屬惠文太子薨，有詔禮部選挽郎，知章取捨非允，爲門陰子弟喧訴盈庭。知章於是以梯登牆，首出決事，時人咸嗤之，由是改授工部侍郎，兼祕書監同正員，依舊充集賢院學士。俄遷太子賓客，銀青光祿大夫兼正授祕書監。〔中略〕知章性放曠，善談笑，當時賢達皆傾慕之。工部尚書陸象先，即知章之族姑子也，與知章甚相親善。象先常謂人曰，賀兄言論倜儻，真可謂風流之士。吾與子弟離闊，都不思之，一日不見賀兄，則鄙吝生矣。知章晚年尤加縱誕，無復規檢，自號四明狂客，又稱祕書外監。遨遊里巷。醉後屬詞，動成卷軸，文不加點，咸有可觀。又善草隸書，好事者供其牋翰，每紙不

過數十字、共傳寶之。「中略」天寶三載、知章因病恍惚、乃上疏請度爲道士、求還鄉里、仍捨本鄉宅爲觀。上許之、仍拜其子典設郎曾爲會稽郡司馬、仍令侍養。御制詩以贈行、皇太子已下咸就執別。至鄉無幾壽終、年八十六。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷一百九十中、列傳第一百四十中）

【作例】

「唐禮部尚書賀公知章」（清・王齡撰、任熊繪『於越先賢像傳讚』卷上、咸豐六年〔1856〕刊本）

「賀知章」（『任渭長畫傳四種』於越先賢傳、中国古畫譜集成第四卷、山東美術出版社、2000年）

かちゅうくんし 花中君子

周濂溪の『愛蓮説』に、「蓮は花の君子である。」という記述がある。

【出典】

花品。周濂溪愛蓮説。菊、花之隱逸者也。牡丹、花之富貴者也。蓮、花之君子者也。（明・張岱撰『夜航船』卷十六・植物部）

【作例】

「花中君子」（葉九如編『三希堂畫譜大觀』草蟲花卉大觀、中国古畫譜集成第十九卷、山東美術出版社、二〇〇〇年）

かつえんらげんしょうしち 活閻羅阮小七

活閻羅阮小七は『水滸伝』の中の豪傑の一人である。活閻羅は彼の綽名である。阮小七はもともと石碣村の漁師であったが、後に梁山泊に入った。

【出典】

吳用道、這三箇人是弟兄三箇、在濟州梁山泊邊石碣村住、日常只打魚爲生。亦曾在泊子裏做私商勾當。本身姓阮、弟兄三人。一箇喚

做立地太歲阮小二、一箇喚做短命二郎阮小五、一箇喚做活閻羅阮小七。「中略」這阮小七頭戴一頂遮日黑笠笠、身上穿箇棊子布背心、腰繫著一條生布裙、把那隻船盪著問道、「二哥、你尋五哥做甚麼。吳用叫一聲、七郎、小生特來相央你們說話。阮小七道、教授恕罪。好幾時不曾相見。（百二十回本『水滸伝』第十五回）」

【作例】

「活閻羅阮小七」（明・陳洪綬繪『水滸葉子』、天啓六年〔1626〕頃の刊本）

「阮小七」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本）

「活閻羅阮小七」（葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸伝』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓）

「活閻羅阮小七」（仮名垣魯文標記、一雲齋国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1828〕不朽堂刊本）

「活閻羅阮小七」（柳水亭種清著、葵岡北溪畫『水滸畫傳』、安政三年〔1856〕序、甘泉堂板）

かつげん 葛玄

葛玄、字は孝先といい、号は葛仙公という。丹陽句容（江蘇省句容）の人である。左慈に師事して『丹液仙經』を授かった。かつて客と食事中で変化のことに言及した。客は曰く、「ぜひ先生にやっていただきたい。」と。玄は曰く、「あなたはまさか慌てて見たいではないね。」と。すると口の中の飯を咳で出した。皆大蜂になり、約数百匹いる。客の身にくっついたが、人を刺さない。しばらくして玄は口を開け、蜂たちが再び口の中に戻った。噛んだら前の口の中の飯であった。また、石の人形を指すと歩かせる。蝦蟇や昆虫類や燕や雀を指すと踊らせる。皆人間のようである。或いは客を招待し、冬は落花生、瓜、棗

を出し、夏は水を出す。また数十銭を人に井戸に投げさせ、器を持って井戸の上で銭を呼び出す。となると、先に投げた銭は次々と飛んでくる。客と酒を飲み、誰も盃を回さないが、盃が自ら回る。そして酒を全部飲まないと、盃も動かない。

晋の武帝(265～290在位)は葛玄を招き、「国民は雨がほしいが、あなたはできるか。」と尋ねた。葛玄は「簡単だ」と答えた。そこで廟の中で符を書いた。しばらくすると、大雨が降り始めた。

葛玄はかつて呉の主君に仕え、別々船に乗り出発した。しかし三江口のあたりで風に遭遇した。多くの船が沈没してしまい、葛玄の船も行方不明となった。呉の主君はため息をしながら、「葛玄が道の術を持っているのに、やはり免れないか。」と呟いた。突然葛玄が水面を歩いてきた。酔っぱらい姿で主君の前に来て、「昨晚伍子胥に無理やり留められて酒を飲まされた。それで陛下を待たせた。」と謝った。ある日、会稽をぶらぶら回ったところで、ある商家が海から帰って来た。一つの神廟を通り、廟の主事が一通の手紙を葛玄に渡すように頼んだ。言い終わると、手紙を船に投げ、帰ってからすぐ葛玄に渡した。葛玄は手紙を開けてみると、すなわち東華山童君の手紙である。「太極左官仙書」と書いてある。葛玄はかつて西峯の石壁の石臼で葉を搗り、一粒の粟をこぼしてしまった。丁度一羽の鳥が通り過ぎて、粟を食べた。その鳥も不老不死となった。今でも夜静かになったとき、その鳥はまた搗で臼を叩くような鳴き声をする。名付けて「搗葉鳥」という。

仙人琴高は葛玄が道を得たのを聞き、二匹の鯉に乗って東海から会いに来た。葛玄と酒を飲んで、一人とも酔っぱらい、白雲に寝てしまった。目が覚めると、二匹の鯉は石になってしまった。代わりに葛玄は琴高に二羽の鶴を贈り、帰した。鯉の石は今日でも残っている。

かつて客が葛玄について舟の旅をした。囊の中を見て、十数の符が

ある。客は「この符は効くだろうか。ぜひ見せてください。」と言った。そこで葛玄はすぐ一つの符を取り出して、水中に投げた。符は水に流れて行った。客は言った。「普通の人が投げたら同じようになるだろう。」と。葛玄はもう一つの符を取って投げた。今回は符が水の流れて遡って行った。「今度はどうだ。」と葛玄が言った。客は「今度は違うね。」と感心した。葛玄はさらに一つの符を取り出して投げた。その符は下りもせず、上りもせず、しばらくすると、先の二つの符は中流に集まり、最後に、三つの符がそろって葛玄の手に戻った。

また、水辺に大きい魚を売っているのを見た。葛玄は主人に頼んだ。「私はこの魚を借りて河伯のところに行かせたいのだ。」と。主人は「魚はすでに死んだ。」と言った。「かまわないよ。」と。すると、丹書を魚の口に入れて、水に投げた。魚は生き返って泳いで行った。

【出典】

葛玄，字孝先。從左元放受九丹液仙經。與客對食言，及變化之事，客曰，事畢，先生作一事，特戲者。玄曰，君得無即欲有所見乎。乃嗽口中飯，盡變大蜂，數百皆集客身，亦不螫人。久之，玄乃張口，蜂皆飛入。玄嚼食之。是故飯也。又指蝦蟆及諸行蟲燕雀之屬，使舞應節如人。冬為客設生瓜棗，夏致冰雪。又以數十錢使人散投井中。玄以一器于井上呼之，錢一一飛從井出。為客設酒，無人傳杯，杯自至前。如或不盡，杯不去也。嘗與吳主坐樓上，見作請雨土人，帝曰，百姓思雨，寧可得乎。玄曰，雨易得耳。乃書符著社中。頃刻間，天地晦冥，大雨流淹。帝曰，水中有魚乎。玄復書符擲水中。須臾有大魚數百頭，使人治之。(晉・干寶撰『搜神記』卷一)

葛玄，字孝先。丹陽句容人。號曰葛仙公。從左慈受丹液仙經。「中略」仙公嘗從吳主各船行。至三江口遇風。船多漂沒。仙公船亦不知所在。吳主嘆曰。葛仙公有道何不能免此踰宿。忽見仙公水上步來。既至，尚有酒態。謝曰，昨伍子胥強邀留飲，是以淹屈陸下。(明・

王世貞撰『有象列仙全傳』卷四)

【作例】

「葛玄」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四、萬曆二八年 [1600] 刊本)

「葛孝先」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十一卷、萬曆三七年 [1609] 刊本)

かつげんめしをはいてはちをつくる 葛玄吐飯作蜂

↓「葛玄」

【作例】

「葛玄吐飯作蜂」(保井恕庵編述、大森搜雲子筆『畫本福寿海』、享保十九年 [1734] 銅駝坊書堂泉屋等刊本)

かつげんなみのうえをあゆむ 葛玄步濤上

↓「葛玄」

【作例】

「葛玄步濤上」(橘守国『繪本鶯宿梅』卷三、元文五年 [1740] 植村藤右衛門刊本)

かつこう 葛洪

葛洪 (284 ~ 363)、字は稚川といい、句容(江蘇省句容)の人である。子供のころから勉強が好きで、自ら薪を伐採して紙や墨と交換する。夜は習字や朗読などをする。遂に儒学を以て名声を上げた。欲が少なく、遊ぶのは好きではなかった。一人でぼうとしていて、名利には興味がない。閉じこもって社交したことがない。時には書物を探したり、討議したりする。どんなに遠くても必ず探しに訪ねて行く。とりわけ神仙の道術が好きである。祖玄に師事して道を学んで仙人と

なった。その秘術を以て弟子鄭隱に伝授した。葛洪はまた隱に師事して、その道術を身に付けた。後に南海太守上党鮑玄に師事した。玄は

内学に長ける。洪を大変気に入る、娘を嫁がせた。葛洪は玄の学問を広げながら、医者業をしていた。著書は内容が豊富で、文章が精密である。晋の成帝(326 ~ 342在位)の咸和(326 ~ 334)の初めころ、司徒王導が葛洪を主簿に任用した。後に散騎常侍などに拔擢されたが、皆付かず、交趾に丹砂が出ると聞き、自ら句扇令になりたいと申し出た。帝は洪が高位の官僚のため、許可しなかった。洪は「名譽のためではなく、彼の地に丹砂が出るからです。」と説得し、帝はようやく認めた。洪は早速子供たちを連れ、一緒に行った。広州に着くと、刺史鄧嶽が洪を留めて行かせない。仕方なく洪は羅浮山にとどまり、丹薬を作ることにした。羅浮山に七年間滞在して、悠々自適で、著書に専念し、内外篇を完成した。凡そ百十六篇になる。名付けて『抱朴子』という。ある日、突然鄧嶽に手紙を送り、「自分の間遠いところに放浪して師を訪ねる。即刻出發する。」という。嶽は慌てて別れに行つたが、洪は日当たりのところに座り、眠るように亡くなった。八十一歳であった。

【出典】

葛洪、字稚川。丹楊句容人也。祖系、吳大鴻臚。父悌、吳平後入晉、爲邵陵太守。洪少好學、家貧、躬自伐薪、以買紙筆。夜輒寫書誦習、遂以儒學知名。性寡欲、無所愛翫。不知碁局幾道、搏蒲齒名。爲人木訥、不好榮利。閉門卻掃、未嘗交游。於餘杭山見何幼道、郭文學、目擊而已、各無所言。時或尋書問義、不遠數千里、崎嶇冒涉、期於必得。遂究覽典籍、尤好神仙導養之法。從祖玄、吳時學道得仙、號曰葛仙公。以其鍊丹秘術授弟子鄭隱、洪就隱學、悉得其法焉。後師事南海太守上黨鮑玄、玄亦內學、逆占將來。見洪深重之、以女妻洪。洪傳玄業、兼綜練醫術。凡所著撰、皆精覈是非、而才章富瞻。〔中略〕

干寶深相親友，薦洪才堪國史。選爲散騎常侍，領大著作。洪固辭不就。以年老欲煉丹以祈遐壽。聞交趾出丹，求爲句漏令。帝以洪資高，不許。洪曰，非欲爲榮，以有丹耳。帝從之。洪遂將子姪俱行，至廣州，刺史鄧嶽留不聽去。洪乃止羅浮山鍊丹。嶽表補東官太守，又辭不就。嶽乃以洪兄子望爲記室參軍。在山積年，優遊閒養，著述不輟。其自序曰，「中略」世儒徒知服膺周孔，莫信神仙之書。不但大而笑之，又將謗毀真正。故予所著子言黃白之事，名曰內篇。其餘駁雜通釋，名曰外篇。大凡內外一百一十六篇。雖不足藏諸名山，且欲緘之金匱，以示識者。自號抱朴子，因以名書。「中略」後忽與嶽疏云，當遠行尋師，剋期便發。嶽得疏，狼狽往別。而洪坐至日中，兀然若睡而卒。嶽至，遂不及見。時年八十一。視其顏色如生，體亦柔軟。舉尸入棺，甚輕，如空衣。世以爲尸解得仙去。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷七十二，列傳第四十二）

【作例】

「葛洪」（清・任熊繪『列仙酒牌』、咸豐四年〔1854〕刊本）

「葛仙煉丹」（王念慈編『当代名畫大觀』初集第三冊、中国古畫譜集成第十五卷、山東美術出版社、2000年）

かつせんばおうていらく 活閃婆王定六

活閃婆王定六は『水滸伝』の中の一人の豪傑である。「活閃婆」は綽名である。もとは父親と一緒に揚子江の畔で居酒屋を営んだが、後に梁山泊に入った。

【出典】

不多時、後面走出一箇後生來，看着張順便拜道，小人久聞哥哥大名，只是無緣不曾拜識，小人姓王，排行第六。因爲走跳得快，人都喚小人做活閃婆王定六。（百二十回本『水滸伝』第六十五回）

【作例】

「王定六」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本）

「活閃婆王定六」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1808〕不朽堂刻本）

「活閃婆王定六」（泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板）

かつほうしきよ 葛豊刺擧

前漢の諸葛豊は、字が少季といい、瑯琊（山東省瑯琊）の人である。性格が剛直で、自分の思考をもって行動する。そのため、漢元帝（前49―前33在位）が彼を司隸校尉（檢察官）に抜擢した。彼が犯罪者を検挙するのにどんな人にも遠慮しなかった。帝が彼を評価し、さらに彼に加俸したという。

【出典】

前漢 諸葛豊、字少季、瑯琊人。以明經爲郡文學。特立剛直。元帝擢爲司隸校尉。刺擧無所避。京師爲之語曰、問何闕、逢諸葛。上嘉其節、加秩光祿大夫。（唐・李瀚撰『蒙求集注』）

【作例】

「葛豊刺擧」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷四、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

かつゆ 葛由

葛由は、羌人である。周の成王の頃、よく木彫りの羊を作って売った。ある日、羊に乗って蜀に入った。蜀の王侯貴族が彼を追いかけた。彼は綏山に上がった。綏山は峨眉山の南西にあり、極めて高い。ついで行った人たちは二度と戻らなかつた。皆は道を得て仙人となった。山の上に桃がある。故に「もし綏山の桃を得れば、仙人になれなくて

も十分自慢できる。」ということわざがある。山の麓に建った祠は数十か所ある。↓ 葛由仙人

【出典】

葛由者、羌人也。周成王時、好刻木羊賣之。一日騎羊而入西蜀、蜀中王侯貴人追之、上綏山。綏山在峨眉山西南、高無極也。隨之者不復還、皆得仙道。故里諺曰、得綏山一桃、雖不得仙、亦足以豪。山下祠數十處云。(漢・劉向撰『列仙傳』卷上)

【作例】

「葛由」(明・王世貞『有象列仙全傳』卷一、萬曆二八年 [1600] 刊本)

「葛由」(林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年 [1712] 序、享保六年

[1721] 保壽堂・養心堂刻本)

「葛由」(寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』一、天明四年 [1784] 寂照寺藏板)

「葛由」(『雅興筆意畫圖絶妙』上、安永三年 [1774] 序、明和九年跋刊本) 「葛由」(葛飾爲齋繪『萬物圖解爲齋畫式』二帙、元治一年

[1864] 序、寶集堂藏板)

かつゆせんにん 葛由仙人

↓「葛由」

かつら 桂

桂は榎木の一種である。数種類がある。

【出典】

桂、榎木也。數品、或白或黄、或紅或紫。黄者能著子、此花四出或五出、或重臺。徑二三分、圓瓣。又有一種四季著花。亦有每月一開者、亦有春而著花者、香皆不減於秋。(明・王圻、王思義撰『三才

圖會』草木十二卷)

【作例】

「桂花」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「桂」(鄭培筆) (副孟義編『宋紫石畫譜』卷下、明和二年 [1765] 序刊本)

かてき 貨狄

貨狄は黃帝の臣下で、舟を發明した人物である。

【出典】

湯曰、剡木爲舟、剡木爲楫。舟楫之利、以濟不通。世本曰、共鼓、貨狄作舟。共鼓、貨狄黃帝二臣。(唐・歐陽詢撰『藝文類聚』卷七十一)

【作例】

「貨狄」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷四、貞享四年 [1687] 刊本、文政1年 [1818] 再刊本)

「貨狄」(某岡之繪『繪圖の林』卷上、元禄二年 [1689] 刊本)

かとう 賈島

賈島 (770-843)、字は浪仙といひ、范陽 (河北省涿州) の人である。

島は和尚であった。一説は、初めは和尚で、無本という戒名であったが、東都に來た時、僧侶を禁ずる法令があるので、午後になると外出禁止であった。そのため、島は詩を作り悲しんだ。韓愈が彼を不憫に思ひ、作文を教えた。遂に僧侶を辞め、科挙の試験を受けたという。もう一説は島は最初都にやってきて科挙の試験を受けたが、うまく行かず、和尚になった。戒名は無本といひ、法乾寺に住み着いて、無可とよく唱和した。島は詩吟の時に、まわりの事に気が付かず、ある日

驢馬に乗って詩句を考えている最中、対面から京兆尹劉棲楚の行列がやってきた。鳥は回避するのを忘れ、ついに警察沙汰になった。一晩牢獄で過ごし翌日に釈放された。それよりもっとも有名な逸話は「推敲」である。鳥が驢馬に乗って「鳥宿池中樹、僧敲月下門。」との詩句を得たが、また「敲」(ノック)より「推」(押す)の方がいいかもしれないと思ひ、身振りをしながら迷っている最中、京兆尹韓愈の行列とぶつかった。鳥が韓愈の前まで引き連れられ、わけを聞かれた。となると、韓愈は「敲」の方がよろしいとアドバイスをした。さらに韓愈は鳥を連れて帰った。二人はともに詩を議論し、数日も滞在したという。

なお、玄宗帝が法乾寺を私服訪問に行った際、鳥が鐘楼の上で詩吟していた。玄宗帝がそれを聞き、鐘楼に上がった。鳥は腕を組んで帝を睨んで、詩集を手に「あなたはなぜこれができるか」といった。帝が鐘楼を降りてから、鳥ははじめて玄宗帝だと分かった。慌てて降りて帝に謝罪した。帝は鳥を遂州の長江簿に任命した。そのため後に鳥はよく「賈長江」と呼ばれるようになった。鳥は最後に普州司倉在任中で亡くなった。年は六十五歳であった。

【出典】

鳥字浪仙、范陽人。初爲浮屠、名無本。來東都時、洛陽令禁僧、午後不得出。鳥爲詩自傷、愈憐之、因教其爲文。遂去浮屠、舉進士。當其苦吟、雖逢值公卿貴人、皆不之覺也。一日、見京兆尹、跨驢不避、嘖詰之、久乃得釋。累舉不中第、文宗時、坐飛謗、貶長江主簿。會昌初、以普州司倉參軍遷司戶未受命、卒年六十五。(宋・宋祁撰『新唐書』卷一百七十六、列傳第一百一)

賈島、字閻仙。元和中、元白尚輕淺、鳥獨變格入僻、以矯浮艷。雖行坐浸食、吟味不輟。嘗跨驢張蓋、橫截天衢。時秋風正厲、黃葉可掃。鳥忽吟曰、落葉滿長安。志重其冲口直致、求足一聯、杳不可得、

不知身之所從也。因之唐突大京兆劉棲楚、被繫一夕而釋之。又嘗遇武宗皇帝於定水精舍、鳥尤肆侮、上訝之。他日有中旨、令與一官、謫去乃授長江縣尉。稍遷普州司倉而卒。(唐・王定保撰『唐諺言』卷十一)

【作例】

「賈島」(明・天然撰『歷代古人像讚』、弘治十一年[1488]刊本)
 「賈島」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六卷、萬曆三十七年[1609]刊本)
 「賈島」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷二、貞享四年[1687]刊本、文政一年[1818]再刊、平埜屋清三郎等刊本)

かに 蟹

↓「無腸公子」

【作例】

「蟹」(狩野養拙筆)(信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』卷四、明和八年[1771]大野木寶文堂梓)
 「蟹」(守政筆)(法眼春卜一翁『和漢名畫苑』五卷、寛延二年[1749]序、大野木寶文堂梓)
 「蟹」(繪本初心柱立)一、正徳五年[1715]新板、寶曆十一年[1761]再刻、小林喜右衛門等刊行)

がび 畫眉

畫眉は鶯に似ているが、やや小さい。その眉が描いたようで「畫眉」と呼ばれるわけである。鳴き声がいい。

【出典】

畫眉似鶯而小、黃黑色、其眉如畫、故曰畫眉。巧於作聲如百舌。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸二卷)

【作例】

- 「畫眉」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）
 「畫眉」（『繪本初心柱立』二、正徳五年 [1715] 新版、寶曆十一年 [1761] 再刻、小林喜右衛門等刊行）

がびさん 峨眉山

峨眉山は嘉定州の峨眉県にある。峨眉山は三つの山があり、いわゆる大峨、中峨、小峨という。大峨は雲の中まで聳える。仏典によると、普賢大士の現れるところである。

【出典】

- 峨眉山在南安縣界，去成都南千里。然秋日清澄，望見兩山相峙，如峨眉焉。（後魏・酈道元撰『水經注』卷三十六）
 峨眉山在嘉定州峨眉縣。峨眉有三山，為一列。曰大峨 中峨 小峨。中峨、小峨皆傳有遊者。今不復有路。惟大峨其高摩霄。為佛書所記。普賢大士示現之所。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理卷十一）
- 【作例】
- 「峨眉山圖」（明・楊爾曾『海内奇觀』卷八、萬曆三十七年 [1609] 刊本）
 「峨眉山圖」（明・王圻、王思義『三才圖會』地理十一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）
 「峨眉」（『名山圖』、崇禎六年 [1633] 墨繪扇刻本）
 「峨眉山」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷二、享保二年 [1719] 寶文堂藏板）

がびさんげつかのず 峨眉山月歌圖

「峨眉山月歌圖」は唐の李白の七言絶句「峨眉山月歌」によるもの

である。

【出典】

峨眉山月半輪秋。影入平羌江水流。夜發清溪向三峽。思君不見下渝州。（李白「峨眉山月歌」、明・李攀龍撰『唐詩選』卷七）

【作例】

- 「峨眉山月歌意」（渡邊瑛編『邊氏畫譜』、文化三年 [1806] 刊本）
 「峨眉山月圖」（晚香散人内藤道有撰、橘守国繪『和漢新圖扶桑畫譜』卷三、享保二〇 [1733] 植村藤右衛門梓行）
 「峨眉山月歌」（鈴木芙蓉繪『畫本唐詩選』二編卷一・七言絶句、寛政元年 [1789] 自序・跋刊本、文化十一年 [814] 再刊、高山房刊行）

かひしきょう 下邳圯橋

↓「張良」、「黄石公・張良」

【作例】

「下邳圯橋」「かひしきょう」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』、明和三年 [1766] 須原屋三郎兵衛等刊行）

かびん 花瓶

【作例】

「花瓶」「徐熙筆」（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』初卷、寛延二年 [1749] 序、大野木寶文堂梓）

かふうさんしゆく 華封三祝

堯は華という地方を視察する。華封の人は「あ、聖人だ。お祈りさせてください。聖人が長壽できるように」と言った。堯は「辞退する」と答えた。「では聖人に富ができるように」と。堯はまた「辞退する」

と答えた。「では、聖人に男の子が沢山出来るように」と。堯はやはり「辞退する」と答えた。封の人は「壽、富、男の子は皆が欲しいものだが、なぜあなただけが欲しくないのか」と聞き、堯は「男の子が多いと、恐怖も増える。富が多いと、トラブルも増える。長壽だと、恥も増える。この三者は徳の修行にはならないので、辞退した」と答えた。封の人は「はじめにあなたは聖人だと思ったが、実際は君子だ。神様が民を生み、必ず仕事を与える。男の人が多くと、仕事を与えて何が怖いのだ。富が多いと、人に分けて何がトラブルになるのだ。聖人が素朴な生活をして、天下が安定であれば、万物が皆榮える。天下が混乱であれば、徳を修業する。千歳になれば、仙人となり白雲に乗り、天帝のところに行ける。そうなると、悪いもないし、禍も及ばないだろう。なぜ恥が増えるだろうか。」と言い、去って行った。堯は後ろを追いかけて聞きたかったが、封の人は「お帰りなさい」と言い残した。

【出典】

堯觀乎華，華封人曰，嘻，聖人，請祝聖人，使聖人壽。堯曰，辭。使聖人富。堯曰，辭。使聖人多男子。堯曰，辭。封人曰，壽、富、多男子，人之所欲也。女獨不欲，何邪。堯曰，多男子則多懼，富則多事，壽則多辱。是三者，非所以養德也，故辭。封人曰，始也，我以女爲聖人邪。今然君子也。天生萬民，必授之職，多男子而授之職，則何懼之有。富而使人分之，則何事之有。夫聖人鶉居而鷄食，鳥行而無彰。天下有道，則與物皆昌。天下無道，則修德就閒。千歲厭世，去而上仙。乘彼白雲，至於帝鄉。三患莫至，身常無殃，則何辱之有。封人去之，堯隨之曰，請問。封人曰，退已。〔莊子〕卷三，天地第十二。

【作例】

「華封三祝」(『圖像合璧君臣故事句解』卷一、寛文一二年 [1672]跋、

延寶二年 [1674] 和刻本)

「華封三祝」[葦の繪で、陸放翁の詩『題新竹』あり](大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年 [1809]序、南嶺館藏板)

かまきり 螳螂

螳螂は斧のような前足を持っている。螳螂は之有、不過、螳蟻、莫翁蟬、石娘、拒斧などの名前を持っている。また天馬といい、走る際馬のような走り方をする。蟬を捕まえるのが得意である。その子は蟬蛸といい、三、四月中、一枝に数百匹の小さな螳螂が誕生される。

齊の莊公は狩猟に出かけた際、一匹の虫が両足を高く挙げ、車輪を止めようとした。莊公は「それは何の虫だろう。」と御者に尋ねた。御者は「これは螳螂だ。虫なのに、進むしか知らない。自分の力を高く評価する一方、敵を軽く見る。」と答えた。莊公は「人間ならば、きつと勇武絶倫だろう。」と言いつつ、馬車を遠回りにして避けた。

【出典】

螳螂，有斧蟲，之有、不過、螳蟻、莫翁蟬、石娘、拒斧等名。又謂之天馬。驥首奮臂，頸長而身輕。其行如飛，有馬之象。故名。尤工捕蟬，執翳自蔽，竦腰舉刃，搏而取之。其子蟬蛸，螳蟻卵也。螳蟻逢樹輒產其卵，皆相連綴，多在小桑上及叢棘間。三四月中。每枝出小螳螂數百。一名專(蟲字傍)螻。本草則謂之桑螵蛸。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸六卷)

齊莊公出獵，有一蟲舉足將搏其輪。問其御曰，此何蟲也。對曰，此所謂螳螂者也。其爲蟲也，知進而不知卻，不量力而輕敵。莊公曰。此爲人而必爲天下勇武矣。迴車而避之。勇武聞之，知所盡死矣。故田子方隱一老馬，而魏國載之。齊莊公避一螳螂，而勇武歸之。(淮南子)卷十八，人間訓)

【作例】

〔蟾蜍〕(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸六卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

〔蟾蜍〕(橋有税『繪本故事談』卷六、正徳四年 [1714] 稱航堂刊本)

〔蟾蜍〕(『職巧雛型錦袋畫譜』、文政十一年 [1828] 新鐫)

〔蟾蜍〕(鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』二編、元治一年 [1864] 序、寶集堂梓)

〔蟾蜍〕(滝澤清畫『潜龍堂畫譜』人物之部、明治十五年 [1882] 求古堂梓)

がま 蝦蟇

蝦蟇は蛙のことである。数種類があり、黒虎、蚰黄、黄蛭、螻蟻、蟾蜍、山蛤という。蝦蟇の腹部に黒い斑点がある。足が短く跳べる。いろんな虫を食べるが、鳴かない。黒虎の体が小さく、黒い口であり、足には小さな斑点がある。蚰黄色の斑点である。前足が大きい。後ろ脚が小さい。しっぽ一本ある。黄蛭、の体中黄色であり、腹部に臍の帯があり、長さは五寸である。螻蟻はすなわち夜鳴のことである。螻蟻の腰が細く、口が大きい。皮膚が黒っぽい。俗に「田鶏」という。蟾蜍の体が大きいし、背中が黒い。斑点こそないが、つぶつぶのようなものも多く、腹部にでこぼこが重なっている。丹書八字があり、頭に角がある。山蛤が大きくて、黄色である。山石の中に隠れる。気を呑み、露を飲むことができる。雑虫を食べない。大きい蝦蟇は「田父」といい、蛇を食べることができる。蛇を見かけると、追いかけていく。蛇が逃げられなくなると、田父は蛇のしっぽを齧る。しばらくして、蛇が死んだ。しっぽの数センチの皮膚が無傷だが、中の肉がきれいに食べられた。

【出典】

蛙。蝦蟇也。數種。有黒虎，有旬（有蟲字邊）音旬黄，有黄忌（有

蟲字邊），有螻蟻，有蟾蜍，有山蛤。其形各別。蝦蟇皮上腹下有黒斑點，脚短能跳。接百蟲即不鳴叫。黒虎身小黒嘴，脚小斑。旬（有蟲字邊）黄斑色，前脚大，後腿小，有尾子一條。黄忌（有蟲字邊）遍身黄色，腹下有臍帶，長五寸分。螻蟻即夜鳴，腰細口大，皮蒼黧色，俗名田雞。蟾蜍形大，背黒，無點，多瘡。磊其腹下，有丹書八字，頭有肉角。世傳三足者妄也。山蛤大而黄色，多在山石中藏蟻能吞氣飲風露，不食雜蟲。其他又有蠹蠅長肱。石螻蟻子之屬。然蝦蟇大者名田父，能食蛇。蛇行田父逐之，蛇不得去，田父銜其尾。久之，蛇死。尾後數寸，皮不損肉已盡也。（宋・謝維新撰『古今合璧事類備要』別集卷九十）

蟾諸。似蝦蟇。居陸地。淮南謂之去蚊。在水者黽，耿黽也。似青蛙。大腹。一名土鴨。黽音猛。蛙，音陞。虜，今江東呼蚌長而狹者爲虜。音皮。蚌含漿，蚌即虜也。鼈三足能，音奈。龜三足黃，山海經曰。從山多三足鼈。大若山多三足龜。今吳興郡陽羨縣君山上有池。池中出三足鼈。又有六眼龜。賁音奔。（『爾雅圖』，嘉慶六年影宋繪圖本重摹刊，藝學軒藏版）

【作例】

〔蝦蟇〕(明・王圻、王思義『三才圖會』鳥獸六卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

〔蝦蟇〕(鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』二編、明治十一年 [1879] 寶集堂梓)

↓ 三足の白蝦蟇

がま 蝦蟇 (蝦蟇仙人)

↓ 「蝦蟇仙人」

【作例】

〔蝦蟇〕(馬場信意『分類畫本良材』卷五、正徳五年 [1715] 刊本)

「蝦蟇」(鈴鄰松筆『狂畫苑』中、明和六年〔1769〕序、安永四年〔1775〕刊本)

「蝦蟇」(蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕刊本)

「蝦蟇」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』享和三年〔1803〕刊本)

「蝦蟇」(鍬形蕙斎『人物略畫式』、文化一〇年〔1813〕刊本)

「蝦蟇像」(古筆了意撰『探幽臨畫』巻上)

がません 蝦蟇仙

↓「蝦蟇仙人」

【作例】

「蝦蟇仙」(老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』下巻、享和三年〔1803〕序、文化六年〔1809〕叙刊本)

がませんにん 蝦蟇仙人

「蝦蟇仙人」は日本語である。江戸時代には「侯先生」や「劉海蟾」や「劉海戲蟾」などの解釈があったが、最終的には「劉海戲蟾」というパターンに定着していた。すなわち劉海(仙人)が三足の蟾を弄ぶという構図の絵である。この構図は元・宋以後の文人画の影響と考えられる。この類の絵は中国の年画にもよく見られる、構図的には「蝦蟇仙人」とやや異なる。

【出典】

雪中展黄越石攜來四仙古像。「中略」一爲海蟾子，哆口蓬髮。一蟾玉色者，戲踞其頂。手執一桃連花葉，鮮活如生。(明・李日華撰『六研齋筆記』巻一)

按海蟾姓劉名轟，與哲同。渤海人。十六登甲科，仕金，五十至相位。

朝退，有二異人坐道傍，延入談修真之術。二人默然，但索金錢一文，雞卵十枚，擲於案。以雞卵累金錢上。轟傍視曰，危哉。二人曰，君

身尤危，何啻此卵。轟遂悟。納印，入終南山學道而仙。「中略」今畫蓬頭跣足嘻笑之人，手持三足蟾弄之，曰此劉海戲蟾圖也。直以劉海爲名。舉世無有知其名者，錄之以資博識。(清・褚人獲撰『堅瓠戊集』巻一)

問，世有海蟾像，是大仙否。披，吾乃先朝宰相，得道後，化一戲蟾瘋子，笑遊塵市，以度世人。(清・劉廷璣撰『在園雜誌』巻四)

【作例】

「無題」「蝦蟇仙人、詩あり」(『詩畫舫』扇譜、中国古畫譜集成第十一巻、山東美術出版社、2000年)

「無題」「蝦蟇仙人、詩あり」(『點石齋叢書』、中国古畫譜集成第九巻、山東美術出版社、2000年)

「無題」「蝦蟇仙人、詩あり」(王念慈編『当代名畫大觀』初集第三冊、中国古畫譜集成第十五巻、山東美術出版社、2000年)

「無題」「蝦蟇仙人」(西川祐信『畫本諭草』三、享保一六年〔1731〕刊本)

「蝦蟇仙人」(大岡道信『押繪手鑑』巻中、元文一年〔1736〕刊本)

「蝦蟇仙人」(尚信筆)、『本朝畫林』巻上、寶曆二年〔1752〕序刊本)

「無題」「蝦蟇仙人」(森玄黄齋畫)『印籠譜』坤、清浄軒、天保十年〔1839〕刊本)

「無題」「鉄拐仙人と蝦蟇仙人」(森玄黄齋畫)『印籠譜』坤、清浄軒、天保十年〔1839〕刊本)

「蝦蟇仙人」(葛飾爲斎繪)『萬物圖解爲斎畫式』二帙、元治一年〔1864〕序刊本)

「慕仙人」(鮮斎永濯繪)『萬物雛形畫譜』四編、明治一二年〔1879〕刊本)

「蝦蟇仙人」(鮮斎永濯繪)『萬物雛形畫譜』五編、明治一二年〔1879〕刊本)

「蝦蟇仙人」（河鍋洞郁『晝齋醉畫』初編、明治一五年 [1882] 刊本）
 「蝦蟇仙人」（溪齋義信筆『溪齋浮世畫譜』）

かめてつとう 烏龜疊塔

杭州には禽虫の芝居をやっている人がいる。七匹の龜の大きさがそれぞれ違う。龜を机の上に置き、太鼓をたたく。その音を聞いて一番大きい龜がまず机の真ん中に行つて四足を貼り付けておく。次に二番目の龜が一番目の龜の背中に貼りつける。このように順番に重なつていく。最後の龜が登つて行つて体をまっすぐにし、しっぽを上向きにする。まるで小さな塔のような形になる。それはいわゆる「烏龜疊塔」である。

【出典】

余在杭州日、嘗見一弄百禽者。蓄龜七枚、大小凡七等、置龜几上、擊鼓以使之。則第一等大者先至几心伏定、第二等者從而登其背、直至第七等小者登第六等之背、乃豎身直伸其尾向上、宛如小塔狀。謂之烏龜疊塔。（元・陶宗儀撰『南村輟耕錄』卷二十一）

【作例】

「烏龜疊塔」（橘有税『繪本故事談』卷四、正徳四年 [1714] 刊本）
 「無題」（松川半山畫『繪口合瓢之蔓』、嘉永四年 [1851] 刊本）

かめろくをかくすず 龜藏六圖

仏教の比喩の一つである。龜が四脚と頭と尻尾を隠すことにより、人間の六欲を抑えることを譬える。

【出典】

昔佛在世時有一道人。在河邊樹下學道。十二年中貪想不除。走心散意。但念六欲。目色耳聲鼻香味。身更心法。身靜意遊。曾無寧息。

十二年中不能得道。佛知可度。化作沙門。往至其所。樹下共宿。須臾月明。有龜從河中出來至樹下。復有一水狗饑行求食。與龜相逢。便欲啖龜。龜縮其頭尾及其四脚藏於甲中。不能得啖。水狗小遠。復出頭足。行步如故。不能奈何。遂便得脫。於是道人問化沙門。此龜有護命之鎧。水狗不能得其便。化沙門答曰。吾念世人不如此龜。不知無常。放恣六情。外魔得便形壞神去。生死無端。輪轉五道。苦惱百千。皆意所造。宜自勉勵。求滅度安。（法句譬喻經・心意品第十一）卷一、『大正新脩大藏經』第四卷、本緣部下）

【作例】

「龜藏六」（大原民聲編、浅野思成筆『名數畫譜』地、文化六年 [1809] 序、文化七年 [1810] 序刊本）

かも 鴨（鳧・鶩）

鴨はまた「鳧」や「鶩」ともいう。「鳧」は野生のものが、「鶩」は家禽である。

【出典】

尸子曰、野鴨爲鳧、家鴨爲鶩。不能飛翔、如庶人守耕稼而已。一名鴨。蓋自呼其名曰鴨也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷）

【作例】

「鴨」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「鴨」（沈銓（南蘋）筆）（法眼春卜一翁集『畫史會要』卷二、寛延四年 [1751] 刊本）

「鴨」（溪齋義信筆『溪齋浮世畫譜』）

「鴨」（尾形光琳『光琳百圖』下、文化一二年 [1815] 跋刊本）

↓「鳧」

かや 榧

榧は山谷に生えている。福建や浙江に多くある。葉は鳳のしっぽのようで、種は茎の中にある。

【出典】

榧子生山谷及閩浙，多有之。葉似鳳尾而子生莖中。味甘溫無毒，食之益肺。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷)

【作例】

「榧子」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)
「榧」(橋守国『繪本直指寶』巻六上、延享二年 [1745] 刊本)

かようさぶ 迦葉作舞

「迦葉作舞」は禪宗の公案の一つである。

【出典】

世尊因乾闥婆王獻樂，其時山河大地盡作琴聲。迦葉起作舞，王問迦葉，豈不是阿羅漢諸漏已盡，何更有餘習？佛曰，實無餘習，莫謗法也。王又撫琴三徧，迦葉亦三度作舞。王曰，迦葉作舞，豈不是。佛曰，實不曾作舞。王曰，世尊何得妄語。佛曰，不妄語。汝撫琴，山河大地木石盡作琴聲，豈不是。王曰，是。佛曰，迦葉亦復如是。所以實不曾作舞。王乃信受。(宋・普濟撰『五燈會元』巻一，七佛)

【作例】

「迦葉作舞」(橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻六、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

からこ 唐子

『日本国語大辞典』(第三巻、小学館、昭和五五年)によると、「中

国風の衣裳や髪形をしている子ども。多く、唐子遊びの絵などに見られる」と説明している。一般的には中国の小児のことを指していると思われる。

【作例】

「唐子」(『草筆骨法麗畫苑』巻下)

からこ 唐子(洛陽兒遊興圖)

【作例】

「唐子」(洛陽兒遊興圖)(法眼周山編『和漢名筆畫英』巻一、寛延三年 [1750] 刊本)

からこあそび 唐子遊

唐子遊は主として中国の小児の色んな遊びが描かれているが、実際には多くの大人の遊びの要素も多く含まれている。江戸時代に於て多くの日本の小児の遊びの要素も取り入れられ、内容が極めて豊富である。

【作例】

「唐子あそび」(溪斎英泉『畫本錦之囊』、文政一年 [1828] 刊本)
「からこ遊び」(葛飾爲斎繪『萬物圖解爲斎畫式』二帙、元治一年 [1864] 序刊本)
「唐子あそび」(『職巧雛型錦袋畫叢』)
「唐子遊び」(雪蕉斎『畫本拾葉』巻中、寛延四年 [1751] 序、寶曆一年 [1751] 刊本)
「唐子遊び」(法眼橋保国『繪本詠物選』巻四、安永八年 [1779] 刊本)

からこあそびのず 唐子遊之圖(嬰兒蛇行乃圖)

【作例】

「無題」〔嬰兒蛇行乃圖〕（『點石齋叢畫』、中国古畫譜集成第九卷、山東美術出版社、2000年）

「無題」〔嬰兒蛇行乃圖〕（『吳友如畫寶』第一集下・古今人物圖、中国古畫譜集成第二十一卷、山東美術出版社、2000年）

「嬰兒蛇行乃圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（嬰兒双六乃遊）

【作例】

「嬰兒双六乃圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（彈琴圖）

【作例】

「彈琴圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（小童囲碁乃遊）

【作例】

「小童囲碁乃圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（小兒書畫を学ぶ圖）

【作例】

「小兒書畫を学ぶ圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（小兒騎樂之圖）

【作例】

「小兒騎樂之圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（鬪鷄乃遊）

【作例】

「鬪鷄乃圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（端陽龍舟）

【作例】

「端陽龍舟」〔張翰の詩あり〕（『詩畫舫』、中国古畫譜集成第九卷、山東美術出版社、2000年）

「端陽龍舟」〔競舟乃圖〕（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

↓「唐子の舟遊び」

からこあそびのず 唐子遊之圖（小兒花車乃遊）

【作例】

「小兒花車乃圖」（橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年〔1745〕刊本）

からこあそびのず 唐子遊之圖（雪中乃遊）

【作例】

「無題」〔雪中乃遊〕（葉九如編『三希堂畫譜』、中国古畫譜集成第十七卷、山東美術出版社、2000年）

「雪中乃遊」(橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年 [1745] 刊本)

からこあそびのず 唐子遊之圖 (輦乃遊)

【作例】

「輦乃遊」(橘守国『繪本直指寶』卷一、延享二年 [1745] 刊本)

からこのふなあそび 唐子の舟遊び

【作例】

「唐子の舟遊び」[絵馬] (葛飾北斎作、『北斎美術館』5、清安山不動院所蔵)

↓「唐子遊之圖」(競舟の遊び)

からじ 唐児

唐児はすなわち唐子のことである。

【作例】

「唐児」(鮮斎永濯繪『萬物雛形書譜』四編、明治十二年 [1879] 刊本)

からす 烏

烏は鴉ともいい、親孝行の鳥である。烏は異変を見ると鳴く。故に人々は烏の鳴き声を聞くと、唾を吐く。烏は極めて長寿である。三匹の鹿が亡くなると、一本の松の木がやっくと枯れる。三本の松の木が枯れると、烏がやっくと死ぬという。

【出典】

烏、孝鳥也。一名鴉。其鳴自呼。見異則噪，故人聞烏噪則唾。性樂空曠，傳涎而孕。舊說烏性極壽。三鹿死後，能倒一松。三松死後，能倒一烏。俗候烏飛翅重，知天將雨。蓋烏陽物也，感陰氣而重。故

俗以此占其雨。廣雅云，純黑而反哺者，謂之烏。小而腹下白不反哺者，謂之雅烏。白項而羣飛者，謂之燕烏。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷)

【作例】

「烏」(明・王圻、王思義『三才圖會』鳥獸一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「烏」(『繪本初心柱立』二、正徳五年 [1715] 刊本、寶暦十一年 [1761] 再刊本)

「烏」(鄰叅筆『戲面抜粹一蝶書譜』卷上、明和七年 [1770] 序刊本)

「烏」(蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年 [1794] 刊本)

「烏」(『職巧雛形錦袋書叢』)

「烏」(尾形光琳『光琳百圖』上、文化十二年 [1815] 跋刊本)

からす 鴉

↓「烏」

【作例】

「鴉」(溪斎義信筆『溪斎浮世畫譜』)

がらん 賀蘭

【作例】

「賀蘭」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 刊本)

かりようこく 訶陵國

訶陵国についての記載は唐代の史書では、「訶陵」や「社婆」や「婆」¹⁾と記されている。唐の李廷寿撰『南史』卷七八には「訶羅陀国」と「訶羅单国」の名前が見られる。その中、「訶羅单国都闍婆州」(訶羅单国、都を闍婆州に置く)との記述があり、おそらく『新唐書』に

いう「閩婆城」であろう。この二つの国はともに南朝宋の元嘉七（430）年に朝貢に来た。「訶羅」は「訶陵」の発音に近いので、おそらく後に訶羅単国と訶羅陀国が訶陵国の一部になったかもしれない。また南朝梁の沈約撰『宋書』卷九七には訶羅単国と訶羅陀国のほか「閩婆達国」が見られ、南朝宋の元嘉年間朝貢に来た国である。清の張廷玉撰『明史』卷三二四には「閩婆、古曰閩婆達」（閩婆、古代では閩婆達と云う）との記述があるため、閩婆達国などの国のことであろう。結局、これらの小さな国々が唐代になって統一した訶陵国となったと推測される。訶陵国は真臘（カンボジア）の南にあり、一説はインドネシアのジャワ島にあるという。

【出典】

「訶陵国、在南方海中洲上居，東與婆利、西與墮婆登、北與真臘接，南臨大海。豎木為城，作大屋重閣，以椽欄皮覆之，王坐其中，悉用象牙為牀。食不用匙筯，以手而撮。亦有文字，頗識星曆。俗以椰樹花為酒，其樹生花，長三尺餘，大如人膊割之取汁以成酒，味甘，飲之亦醉。貞觀十四年，遣使來朝。大曆三年、四年皆遣使朝貢。元和十年，遣使獻僧祇童五人、鸚鵡、頻伽鳥并異種名寶。以其使李訶内為果毅，訶内請迺授其弟，詔褒而從之。十三年，遣使進僧祇女二人、鸚鵡、玳瑁及生犀的等。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷一九七）

「訶陵，亦曰社婆，曰閩婆，在南海中。（中略）王居閩婆城。其祖吉延東居於婆露伽斯城，旁小國二十八，莫不臣服。（中略）至上元間，國人推女子為王，號悉莫，威令整肅，道不舉遺。大曆中，遣使者三至。元和八年，獻僧祇奴四、五色鸚鵡、頻伽鳥等。憲宗拜内四門府左果毅，使者讓其弟，弟嘉美，並官之。訖大和，再朝貢。咸通中，遣使獻女樂。（宋・歐陽修、宋祁撰『新唐書』卷二二二下）

「閩婆，古曰閩婆達。宋元嘉時，始朝中國。唐曰訶陵，又曰社婆，其王居閩婆城，宋曰閩婆，皆入貢。洪武十一年，其王摩那駝喃遣使

奉表，貢方物，其後不復至。（清・張廷玉等撰『明史』卷三二四）

【作例】

「訶陵國」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「訶陵國」（寺島良安編『和漢三才圖會』卷一、正徳三年 [1713] 序刊本）

「訶陵國」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 刊本）

かる 訛魯

「訛魯国については詳細な記載が見られない。元の周致中撰『異域志』には、訛魯人は犬戎の末裔で、目が深く髪の毛が黄色であるという。具体的な地理的位置は不詳である。

【出典】

人眼深髮黃，壘木植為屋宇巢居而已，西胡犬戎之裔也。與野人無異，有巢居穴處之風。（元・周致中撰『異域志』卷之下）

「訛魯人眼深髮黃，壘木植為屋宇，至應天府馬行一年八個月。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷）

【作例】

「訛魯」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「訛魯」（訛魯）（寺島良安編『和漢三才圖會』卷一、正徳三年 [1713] 刊本）

「訛魯」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年 [1719] 刊本）

かろうせん 賈浪仙

↓「賈島」

かわをわたるうしやくなんにあう 涉河老若逢難

冬の日、紂王が妲己と共に露台上に上り、遠方を眺望する。遠くに流れている野水河が寒さで薄氷が出来ている。ある老人と若者が川を渡ろうとしているが、若者は迷いながら何回も渡ろうとしたが、終に寒くて河岸に戻った。その一方老人は迷いなく川を渡った。紂王が不思議に思い、妲己に「なぜ若者が寒さに弱く、老人が寒さに強いだろうか」と尋ねた。妲己は「若者は父母が年を取ってから生まれた子で、足の骨髄が少ない。老人は父母が若い頃生まれた子で、足の骨髄がいっぱいだからだ」と答えた。そこで、妲己の話を確認するために、二人を捕まえて来て足を切断したのである。

【出典】

當日紂王共妲己遊西鹿臺，前有一河號曰野水河。妲己共紂王登臺上而坐，望見河岸上冬月凌冰，二人欲下水，有一年少者怕冷不敢下水，數次上岸。老者不怕冷而撩衣便過。王問妲己曰，此二人，年少，卻懼冷，年老不懼冷涉河，何哉。妲己奏曰，年少者是老生之子，髓未滿其脛，陽氣衰弱怕冷，不敢涉水。年老者是少生之子，骨髓滿其脛，傲寒耐冷，雖是肌毛枯伐，陽氣太盛，故不怕冷，便涉河而過。紂王曰，如何見得。妲己奏曰，恐我王不信，教左右提取二人，敲脛看之。紂王曰，依卿所奏。令左右提取二人來，斲脛看之，果然如此。（『新刊全相平話武王伐紂王書』卷中）

【作例】

「紂王斲脛」〔『新刊全相平話武王伐紂書』卷中、至治年間 [1321] 133〕建安虞氏刊本
 「涉河老若逢難」〔法橋玉山畫『畫本玉藻譚』卷二、文化二年 [1805] 刊本〕

かん 鶴

鶴は水鳥である。その形は鶴に似ている。巨石の下に蛇がいるかわかる。なお、鶴が水面に集まるため、人々は火災を避けるために、鶴を沢山集める。

【出典】

鶴，水鳥也。形狀略如鶴。其性甘帶，每遇巨石，知其下有蛇，即於石前如術士禹步其石，防然而轉。禽經云，鶴俯鳴則陰，仰鳴則晴。善羣飛薄霄。拾遺記云，鶴能聚水巢上，故人多聚鶴鳥以禳卻火災。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷）

【作例】

「鶴」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本〕

がん 鴈

鴈はまた「朱鳥」ともい、渡り鳥である。中国では冬になると、北から南へ飛んでくる。

【出典】

一名朱鳥，霜降南翔，冰泮北徂，其性惡熱。故中國始寒而北至。周官以禽作六摯，大夫執鴈，鴈夜泊洲渚，令鴈奴闌而警察，飛則銜蘆而翔，以避贈繳有遠害之道。故取以爲摯，非特取其有去就之義也。博物志曰，鴻毛爲囊，可以渡江不漏。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷）

【作例】

「鴈」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本〕

〔鴈〕（中村惕齋撰『訓蒙圖會』卷十三、寛文六年〔1666〕刊本）

〔雁〕〔枯蘆に雁〕（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』卷下、明和三年〔1766〕刊本）

〔雁〕（葛飾爲斎繪『萬物圖解爲斎畫式』二帙、元治一年〔1864〕序刊本）

〔鴈〕〔枯蘆に雁〕（葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』二編、嘉永二年〔1819〕叙刊本）

〔鴈〕（蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕刊本）

〔鴈〕（『草筆骨法麗畫苑』卷上）

〔鴈〕（『北溪漫畫初編』）

〔雁〕（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』二編、明治一二年〔1879〕刊本）

〔鴈〕（雪蕉斎『畫本拾葉』卷中、寛延四年〔1751〕序、寶曆一年〔1751〕刊本）

〔鴈〕（『繪本初心柱立』二、正徳五年〔1715〕刊本、寶曆一一年〔1761〕再刊本）

〔鴈〕（橘守国畫圖『運筆籠畫』卷中、寛延一年〔1748〕序、弘化一一年〔1844〕刊本）

〔無題〕〔鴈〕（木風翁文紹編『古今名家畫苑』初編）

かんあく 韓偓

韓偓（824～923）、字は致光といい、京兆万年（陝西省西安）の人である。龍紀元年（869）に進士に及第した。左諫議大夫、中書舍人などを歴任した。昭宗の頃、兵部侍郎を拜命した。後に濮州司馬、榮懿尉、鄧州司馬に左遷され、二度と朝廷に戻らなかった。

【出典】

韓偓字致光，京兆萬年人。擢進士第，佐河中幕府。召拜左拾遺，以疾解。後遷累左諫議大夫。宰相崔胤判度支，表以自副。王溥薦爲

翰林學士，遷中書舍人。偓嘗與胤定策誅劉季述，昭宗反正，爲功臣。

（中略）及胤召朱全忠討全誨，汴兵將至，偓勸胤督茂貞還衛卒。又勸表暴內臣罪，因誅全誨等；若茂貞不如詔，即許全忠入朝。未及用，而全誨等已劫帝西幸。偓夜追及鄆，見帝慟哭。至鳳翔，遷兵部侍郎，進承旨。（中略）全忠見帝，斥偓罪，帝數顧胤，胤不爲解。全忠至中書，欲召偓殺之。鄭元規曰，偓位侍郎學士承旨，公無遽。全忠乃止，貶濮州司馬。帝執其手流涕曰，我左右無人矣。再貶榮懿尉，徙鄧州司馬。天佑二年，復召爲學士，還故官。偓不敢入朝，挈其族南依王審知而卒。（宋・歐陽修、宋祁撰『新唐書』卷一百八十三，列傳第一百八）

【作例】

〔韓偓〕（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕刊本）

かんう 関羽

関羽（160～219）、字は雲長といい、河東解（山西省）の人である。劉備と張飛と三人で兄弟の契りを交わして、劉備を補佐し蜀の国造りに大きく貢献した。関羽はかつて戦闘中流れ矢に撃たれ、左の腕がなかなか治らない。とりわけ雨の天気になると、骨がよく痛む。医者は「矢の先に毒が付いているので、腕を切り開いて骨の毒を削らなければならぬ。そうすると、完治できる。」と説明した。となると、関羽が腕を伸ばして、手術するよう医者に頼んだ。ちょうどその時に、関羽が部下たちを招き、酒を飲んでるところである。関羽の腕の血が受け皿にいっぱい流れているにもかかわらず、羽はいつもの通り酒を飲みながら、談笑していた。

【出典】

關羽字雲長，本字長生，河東解人也。亡命奔涿郡，先主於鄉里合徒衆，而羽與張飛爲之禦侮。先主爲平原相，以羽、飛爲別部司馬，

分統部曲。先主與二人寢則同牀，思若兄弟，而稠人廣坐，侍立終日，隨先主周旋，不避艱險。「中略」羽嘗為流矢所中，貫其左臂，後創雖愈，每至陰雨，骨常疼痛。醫曰，矢鏃有毒，毒入于骨，當破臂作創，刮骨去毒，然後此患乃除耳。羽便伸臂令醫劈之，時羽適請諸將飲食相對，臂血流離，盈於盤器，而羽割炙引酒，言笑自若。（晉・陳壽撰『三國志』卷六，蜀書・關張馬黃趙傳第六）

【作例】

- 「関雲長像」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物五卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)
- 「関壯穆」[關羽] (『繪圖三國演義』「第一才子書」、上海図書集成局、光緒十六年 [1890] 刊本)
- 「関雲長獨行千里」(『三國志』、清刊本)
- 「関羽」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保二年 [1719] 刊本)
- 「関羽」[雲谷等傳筆] (法眼春卜一翁『和漢名畫苑』三卷、寛延二年 [1749] 序刊本)
- 「関羽」[趙子昂筆] (法眼周山編『和漢名筆畫英』卷一、寛延三年 [1750] 刊本)
- 「関羽」(玉翠齋藤原義包圖『畫圖撰要』卷上、明和二年 [1766] 刊本)
- 「関羽」[李笠翁筆] (信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』卷二、明和八年 [1771] 刊本)
- 「蜀関羽」(信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』卷六・補遺、明和八年 [1771] 刊本)
- 「関羽」(武者周榮筆『古畫要覽』、安永九年 [1780] 刻成、文化九年 [1812] 求版)
- 「関羽」(蕙齋北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年 [1794] 刊本)
- 「関羽」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 刊本)

「関羽」(馬場信意撰『分類畫本良材』卷七、正徳五年 [1715] 須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛藏板)

- 「関羽」(溪齋英泉『畫本錦之囊』、文政十一年 [1828] 刊本)
- 「無題」[関羽] (森玄黄齋畫『印籠譜』坤、天保一〇年 [1839] 刊本)
- 「関羽」(葛飾爲齋繪『萬物圖解爲齋畫式』初帙、元治一年 [1864] 序刊本)

「関羽」(溪齋義信筆『溪齋浮世畫譜』)

「関羽」(鮮齋永濯繪『萬物雛形畫譜』初編、明治十一年 [1879] 刊本)

「関羽」(『職巧雛型錦袋畫叢』)

「関羽像」[宋・馬遠筆] (古筆了意筆撰『探幽臨畫』卷上)

「無題」[関羽] (『圓翁畫譜』)

かんう・しゅうそう 関羽・周倉

【作例】

- 「関壯穆」[関羽・周倉] (百二十回本『繪圖三國演義』、光緒十六年 [1890] 上海図書集成局刊本)
- 「関羽・周倉」(竹原信繁『畫賛常農山』三、寛政四年 [1792] 序、寛政五年 [1793] 刊本)
- 「関羽・周倉」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 刊本)
- 「関羽・周倉」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 刊本)

かんう・しゅうそう・ろしゆく 関羽・周倉・魯肅

【作例】

- 「関羽・周倉・魯肅」(英一峰『畫本圖編』卷下、寛延四年 [1751] 序、寶曆二年 [1752] 刊本)

かんうたんとうこのかいにおもむくず

関羽単刀赴呉會圖

呉の孫權（222～252 在位）が劉備（221～233 在位）の荊州を要求したが、荊州を警備する関羽に断られた。そこで、孫權の臣下魯肃が関羽を宴会に招き、隙を見て暗殺する提案をした。孫權がそれに賛成し、関羽に招待状を出した。関羽がその招待を受け、身の危険を顧みず宴会に赴いた。

【出典】

辰時後、見江面上一隻船來、艚公水手只數人、一面紅旗、風中招颯、顯出一個大關字來。船漸近岸、見雲長青巾綠袍、坐於船上、旁邊周倉捧着大刀、八九箇關西大漢、各跨腰刀一口。魯肅驚疑、接入庭內。（一百二十回本『三国演義』第六十六回）

【作例】

「関雲長単刀赴會」〔『三国志通俗演義』卷七、萬曆十九年〔1621〕校刊本〕

「関雲長単刀赴會」（百二十回刊本『李卓吾先生批評三国志』第六十六回、明末建陽呉觀明刊本）

「関雲長単刀赴會」〔繪圖『三国演義』「第一才子書」、上海図書館集成局、清光緒十六年〔1890〕刊本〕

「関羽単刀赴呉會圖」〔橋有税「橋氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷七、享保五年〔1720〕刊本〕

かんうんちようかっこつりょうどく 関雲長刮骨療毒

関羽が戦闘中、敵の毒矢にやられた。神医華陀がそれを聞き、小舟で関羽軍を訪れた。ちょうどその時に、関羽が馬良と囲碁をしているところである。華陀は関羽に手術をしなければならぬことを告げ、

関羽は腕を伸ばし、手術するよう命じた。そこで華陀が将校に大きな器を持ってきて、血を受け取るよう頼み、手術を始めた。華陀は関羽の腕を切開し、すでに毒で青くなった骨を削る。それを見る将校たちは皆顔色が青白くなった。一方関羽が馬良と囲碁をしながら、談笑する。

↓「関羽」

【出典】

忽一日、有人從江東駕小舟而來、直至寨前。小校引見關平。平視其人、方巾闊服、臂挽青囊。自言姓名、乃沛國譙郡人、姓華、名佗、字元化。因聞關將軍乃天下英雄、今中毒箭、特來醫治。平曰、莫非昔日醫東吳周泰者乎。佗曰、然。平大喜、即與衆將同引華佗入帳見關公。時關公本是臂疼、恐慢軍心、無可消遣、正與馬良弈棋。聞有醫者至、即召入。禮畢、賜坐。茶罷、佗請臂視之。公袒下衣袍、伸臂令佗看視。佗曰、此乃弩箭所傷、其中有烏頭之藥、直透入骨。若不早治、此臂無用矣。公曰、用何物治之。佗曰、某自有治法、但恐君侯懼耳。公笑曰、吾視死如歸、有何懼哉。佗曰、當於靜處立一標柱、上釘大環、請君侯將臂穿於環中、以繩繫之、然後以被蒙其首。吾用尖刀割開皮肉、直至於骨。刮去骨上箭毒、用藥敷之、以線縫其口、方可無事。但恐君侯懼耳。公笑曰、如此、容易、何用柱環。令設酒席相待。公飲數杯酒畢、一面仍與馬良弈棋、伸臂令佗割之。佗取尖刀在手、令一小校捧一大盆於臂下接血。佗曰、某便下手、君侯勿驚。公曰、任汝醫治。吾豈比世間俗子、懼痛者耶。佗乃下刀、割開皮肉、直至於骨、骨上已青。佗用刀刮骨、悉悉有聲。帳上帳下見者、皆掩面失色。公飲酒食肉、談笑弈棋、全無痛苦之色。（百二十回本『三国演義』第七十五回）

【作例】

「関雲長刮骨療毒」〔『三国志通俗演義』卷八、萬曆十九年、金陵周

曰校刊本)

〔関雲長刮骨療毒〕(『明公批点合刻三国水滸全傳英雄譜』、崇禎年間
[1628～1644] 刊本)

〔関雲長刮骨療毒〕(百二十回本『李卓吾先生批評三国志』第七十五
回、明末建陽吳觀明刊本)

〔関雲長刮骨療毒〕(『繪圖三国演義』「第一才子書」、上海図書館集成局、
光緒一六年 [1890] 刊本)

〔関羽割臂圖〕(葛飾應爲作、麻布美術工芸館所蔵、『肉筆浮世絵大観』
6)